Japan Association of Synthetic Anthropology

総合人間学会

Newsletter　第 50 号　2024 年 9 月 30 日発行

発行人：古沢広祐
事務局：〒770-8502 徳島市南常三島町 1-1 徳島大学総合科学部 熊坂元大研究室
電　話：088-656-7150（直通）
E-mail：contact@synthetic-anthropology.org

【　目　次　】

Ⅰ．巻頭言……p.1

Ⅱ．第 18 回大会シンポジウム報告・WS 実施者報告……p. 2

Ⅲ．2023 年度 総会報告……p. 4

Ⅳ．理事会・運営委員会報告……p. 9

Ⅴ．役員、決算・予算資料など……p. 11

Ⅵ．事務局からのお知らせ……p. 13

Ⅰ．巻頭言

第 9 期（2022～23 年年度）では、若い世代からの発言やアイデアがなるべく生きるような場づくりと運営に心がけてきました。2024 年 5 月には、理事提案のオンライ特別企画『 総合一人間、学を問う：我が閉ざされた足下から開かれゆく世界に於いて、人間たる出来事を掬い取る』（MLA＋研究所主催、本学会共催）が開催されました。そして 2024 年研究大会は、お陰様で学習院大学にての実開催（オンライン併用）にてたいへん興味深いプログラムの開催となりました。

内外の時代状況は混沌化し、人間存在への総合的視野からの問い直しが、今こそ真剣に求められています。今回の研究大会をはじめとして、学会誌『総合人間学 18：近代的「知」のあり方を問い直す　―　授けられる「科学」/「学習」時代に、「学び」はどう対峙する？』、オンラインジャーナル１８号などは、本学会の重要な社会的発信だと思います。

学会員の皆様には、学会の今後の活動へのさらなるご協力とともに、会員の拡大普及につきましても、ご支援頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

第 10 期は、学会 20 年の歩みの締めくくり、ないしは仕切り直しを考える時期になります。この間、創設世代の方々の御逝去や世代交代が進む中で、学会の存在意義とはたすべき役割や課題が改めて問われています。

そこで、この第 10 期では、学会設立 20 周年（2026 年）に向けて、学会活動の諸課題を明確にしつつ、今後の展望を検討していくような準備委員会を発足させたいと思います。当面は会長・副会長を中心に、

賛同・協力者を募る中で、どのような準備会になるかを考えます。仮称「設立20周年検討委員会」としますが、すでに関連で活動している、KW集刊行委員会、学会運営・会則等検討委員会、活動準備中の名誉会長・追悼論集特別企画準備会などとの連携をとりながら、適宜進めて行きたいと思います。
　このような趣旨にご賛同とともに、ご協力を頂けますと幸いです。

総合人間学会、第10期会長　古沢広祐

Ⅱ．第18回大会シンポジウム報告・WS実施者報告

1. 大会シンポジウム報告

　第18回研究大会となる2024年大会のシンポジウムは、「総合人間学から『ケア』を問う：人類・社会・個人をテーマとして、特別講演として山極壽一氏、シンポジストとして桜井智恵子氏、本多俊貴氏、大橋恵美子氏をお招きして開催した。高橋在也氏、片山善博氏にコメンテーターをお願いし、司会は蔭木が務めた。テーマは、2023年10月から12月にかけて、オンライン会議やメールを通じた理事・運営委員の活発な意見交換をもとに、「「人間」における「ケア」を再考することで、「人間」の一つの特徴としての「ケア」の諸相を追求し、現実の「ケア」の諸問題を乗り越えるための手がかりをそこに探ってみたい」（趣旨文）という意図のもと設定したものである。
　山極氏による特別講演は「人間にとって、ケアとは何か　人類学・霊長類学から考える」と題され、ゴリラ、チンパンジー、オランウータンといった類人猿との比較から人間のケアを問い直す内容であった。共感能力により互酬性にもとづく共同体を形成して、脳容量の大きい子供を育んだことが示された上で、現代においては言語による世界的な繋がりが情報化社会をもたらした一方で、人間に本質的な共感とケアに基づく関係が希薄化していることを指摘し、新たな社交による文化の再構築、共感能力を用いた共助の意義が提示された。
　シンポジウムは、桜井報告「資本主義社会におけるケアと経済の位置どり　切り離し、依存しながら、否認する」から始まった。報告は新自由主義的なグローバル経済の中で、ケアはそこから排除される非経済的な活動とされながら、それを支援し補完するものとして包摂されていることを批判し、資本主義的価値観を拒否してケアの搾取に抵抗する必要性が示された。
　続く本多報告「地域社会に埋め込まれたケア−「人間的なケア」の把握に向けた予備的考察−」では、過疎化･高齢化により相互扶助的機能が消滅していく現下の村落でのケアをフィールドワークから問い直し、村落生活においては互助がなお多面的に残存することを示した上で、自立と相互性を前提とした扶助を、農村のケアのあり方として浮かび上がらせた。
　最後に大橋報告が、「ケアからケアリングへ〜ケアの継続が人の成長へとつながる学知〜」と題して、一方向的なケアのあり方を再考し、ケアする側とされる側が互いに共感を育みつつ人間同士の関係を築いていくケアリングの概念を、看護の現場とそれを取り巻く社会状況を踏まえつつ紹介した。
　報告を踏まえ、コメンテーターの高橋氏は、ケアの到達点として自分の人生を自分に取り戻すという視座を共有しつつ、地域包括ケアなどの観点から、それぞれの報告者の立場や観点においてケアがいかに把握されるかを質問した。同じく片山氏は、桜井氏が批判する現下の経済システムのもと制度化されたケアと、山極氏が提起した本質的なケアとの間で現場の人間がジレンマに陥ることを指摘、それぞれの報告者に現状の先にある展望を質問した。
　パネルディスカッションでは報告者からコメンテーターへの応答が行われ、桜井氏からは制度を下から変える既存の諸実践に研究者がもっと着目すべきという提起、本多氏からは行政機能の脆弱さの中で互助機能が存続していくという構造、大橋氏からは専門職のケアの実践が専門知と人間的関与の両面で行われ

ることが、それぞれ示された。さらに会場質疑で四名から質問を受け、議論は懇親会に引き継がれて盛会となった。

蔭木達也

2. ワークショップ実施者報告

キーワード委員会、ワークショップ「総合人間学におけるキーワード（KW）とは何か、それは如何に記述されるべきか」 報告

コロナ禍の期間をはさんで数年間検討してきた総合人間学キーワード集作成委員会が第一期の成果を公開したのを期に、これまでの活動を振り返るとともに、次期に向けての活動を提案した。まず穴見委員が、従来の公募企画を振り返り、応募されたキーワードの検討で問題になった点などを指摘した。

続いて長谷場委員と古沢委員が検討すべきキーワードを提案した。長谷場委員は「生命と人間の自律」をあげ、生命の根本現象である「恒常性」(ホメオスタシス)と関係づけた見解を述べた。古沢委員は、「人新世」をテーマにした自著を例にして、これと関連する事項、例えば「資本主義」などがキーワードとなることを指摘した。さらに、ヒト、動物、環境に対する統合・拡張的なアプローチを意味する「One Health」や「Planetary health」の概念を指摘し、本学会においても広い意味での「健康」が検討すべきテーマであり、重要なキーワードになるのではないかと提案した。但し「健康」概念には、自然科学（医学）のような実証的科学とは異なる「生政治」「優生思想」批判のような人文社会（規範的）科学のアプローチもあり、総合的な記述について留意すべき点を強調した。

こうした発表を踏まえて、過去の大会の実行委員長を含んでフロアとオンライン参加者を交えた活発な議論が展開された。最後に、太田委員が、KW を抽出する候補として過去の大会シンポジウムテーマがどのように変遷してきたかを紹介し、穴見委員が第二期の活動の見通しを簡潔に紹介した。

太田　明

若手ワークショップ 「宗教生活のダイナミズム」 報告

若手ワークショップでは、前野清太朗・内藤幹生の報告にもとづいて、「宗教生活のダイナミズム」という企画を実施した。本年度の若手委員会でも例年通り、複数回の準備会を行っており、人間生活を見直して現代社会の問題に向き合う研究課題を探った。本企画の趣旨は、多くの人間が日常生活の中で継承した葬送儀礼・先祖祭祀および民間信仰に注目して、＜生活に埋め込まれた宗教＞を時代状況の変化に即して動態的に捉え直す点にある。

前野会員は台湾農村研究に取り組む社会学者であり、ここでは中華圏と日本の北陸にみる葬送儀礼・先祖祭祀の変化を報告した。内藤会員は近世・近代の隠れキリシタン研究に取り組む歴史学者であり、近世から近代の移行期に国家政策の転換を受けて、闘争を孕みつつ劇的に変容した隠れキリシタン信仰を、地域社会に注目して考察した。また、報告後の質疑応答では、「ダイナミズムとは何か」等の重要なコメントがあった。

本多俊貴

まなキキ、ワークショップ 「能登半島地震の災害対策の理想と現実 ― 石川県災害対策本部員会の映像分析から」報告

当日は、ハイブリッド開催という性質を生かし、学習院大学の対面会場と能登半島・輪島市門前町の現

地の活動現場とをつないで、「能登半島地震の災害対策の理想と現実：石川県災害対策本部員会議の映像分析から」というタイトルで報告を行った。

報告は、2024 年 1 月 1 日能登半島地震発災に伴い設置された災害対策本部が開催してきた災害対策本部員会議（一月に開催された全 31 回）の量的・質的分析結果の報告をもとに考察を通じて論点を挙げ、特に「公共性」というキーワードを挙げながら、対面・オンラインで参加してくださった皆様と議論することができた。途中、能登の現地との回線が悪くなる場面もあったが、これもまた現地の不十分な環境を象徴するものであったといえる。

そもそも Learning Crisis 研究会では、障害や事情のある子どもたちを対象とした学びの支援に取り組んできた。今回、能登半島地震に目を向けたのも、さまざまな混乱・困難下に子どもたちが置かれてしまうのではないか、という懸念を持ったことがそのきっかけであった。しかしながら、一月より定期的に被災地に支援に入っていた柴田に意識されたのは、公共性に対する信頼の軽視や欠落という問題点であった。当日は、柴田が能登半島の被災現地から中継を行い、上記問題意識を共有した。その後、松崎から主に量的分析の結果と考察、江頭からは質的分析の結果と考察、濱松からはＳＮＳ活用との関連からの分析について報告が続いた。

ボランティアの受け入れをめぐる議論の変遷や、行政がボランティアを管理・統括して被災地支援に取り組むといった方針、会議参加者の取り扱い方や会議の進行・構成のされ方などからは、県の対策本部が陥った行政役割への盲信とその誇示の傾向を指摘することができた。フロアからは、なぜそのような官僚主義的な対応になりえたのか、過去の災害発生時の他の行政の取り組みとの比較検討の必要性も指摘され、活発に論点などを挙げていただいた。

行政批判というよりも、不測の事態でコントロールが及ばないような事態――事前に想定された緊急事態の対応力では果たしきれない状況に陥ることこそが、Crisis なのであれば、その Crisis に誰が、どう対峙していくことができるのかが問われねばならない。どこかの機関や組織が“該当の担当者”として対応するのではなく、ここで生きる私たちひとりひとりが主体的に対峙せねばならない。そうした公共性の芽を摘みかねないような対応は、将来の公共性をますます貧弱なものにさせかねないのではないか。より、丁寧に実態を整理し比較検討を進めながら、議論していく準備を重ねたい。

松崎良美

Ⅲ．2023 年度総会報告

日時　　2024 年 6 月 15 日　11 時 20 分～12 時 20 分　　場所　学習院大学および Zoom

はじめに北見秀司会員が議長に選任された。続いて古沢広祐会長から挨拶があった（巻頭言参照）。

各種報告・審議事項など

1. 事務局活動報告（鈴木伸国 事務局長）

- 本学会の状況について、会員数（182 名、うち会費減額会員 33 名、会費免除会員 7 名）および 2023 年 4 月から 2024 年 3 月までの入退会者数（入会 7 名、退会 10 名、ただし逝去会員含む）について報告があった。
- またこれまでの理事会・運営委員会の活動日程の報告と、次年度の活動計画についての説明があり、後者について承認された（詳細は NL 末尾を参照）。

2. 学会運営・会則等検討委員会（黒須三恵 委員長）

・ 個人情報取り扱い方針（プライバシーポリシー）案を作成した。（学会 HP に掲載予定）

3 ハラスメント防止規約準備委員会 （本多俊貴 委員長代行）

・ 総合人間学会「ハラスメント防止宣言（仮）」の草案を作成し、理事会・運営委員会で検討していく。ハラスメント防止のあり方は、より広い学会員に有用なものでなければならないため、個々の会員から意見を集める方法も検討する。

4. 編集委員会（佐貫浩 委員長）

・ 『総合人間学』のオンラインジャーナル版と書籍版との関係等について、合評会を含めて、運営委員会で検討していきたい。
・ 『総合人間学会』名誉会長（小林直樹・小原秀雄）のご逝去に伴う特別号の準備をする。追悼論集特別企画は、会長・副会長を中心に継続準備中である。
・ オンラインジャーナル「総合人間学・第 18 巻」に掲載された投稿論文の J-Stage 掲載作業を実施する。
・ J-Stage 登録に際して必要となる項目を追加すべく、投稿規定を改訂する。

5. 出版企画委員会 出版企画委員会（中村俊 委員長）

・ 運営委員会・理事を対象に出版企画のあり方についてアンケートを実施。以後 3 回の出版企画委員会、運営会議の議論を経て 2024 年 4 月 27 日の運営委員会に以下を提案した。10 期に新規委員会の体制にて議論を継続し、実施方針を決定する。

[提案]

・ 学会規約上の機関誌の役割は現行の電子ジャーナルが担うものとし、出版企画委員会は以下(1), (2), (3) の活動を推進する。
  (1) 特集号の出版
    ・ 出版は不定期。特集内容は年会、電子ジャーナル、各種委員会活動等を踏まえて決定。
  (2) 総合的な web プラットフォームの活用
    ・ 学会シンポジウムは演者の許可を得、終了後の一定期間登録者のみに公開（YouTube あるいは電子ジャーナルに大会特集号として掲載してもよい。
    ・ 会員の発意による多彩な WEB 活用をすすめ、自由に試行しながら発展させる。
  (3) 現在の出版企画委員会は改組し、副会長を含む３～４名の委員で構成する。
    ・ 特集号の執筆要項、WEB 活動の規約、委員会の名称等は新規委員会で検討し決定する。

6. 研究・談話委員会（木村武史 委員長）

・ 2023 年度の活動について 4 回の会合（地域開催の関西談話会を含む）を開催した。
  (1) 2023 年 7 月 16 日（第 22 回関西談話会）京都市左京区役所総合庁舎会議室
    発表 1：上柿崇英「〈自己完結社会〉論と「現代人間学」の方法論」
    発表 2：河野勝彦「ロイ・バスカーの批判的実在論：自然科学と社会科学の違い」
  (2) 2023 年 7 月 23 日 研究談話会、上智大学 7 号館 4 階共用室 A（対面・オンライン併用）
    講師：大上泰弘氏（帝人株式会社、博士（東京工業大学））
    （テーマ）「クスリはどうやって生み出されているのか？」
  (3) 2023 年 10 月 1 日 研究談話会（オンライン開催）
    講師：倉本宣氏（明治大学農学部教授）
    （テーマ）「市民参画型の里山管理における目標とする自然についての合意形成」
  (4) 2023 年 12 月 10 日（第 23 回関西談話会）京都市左京区役所総合庁舎会議室
    発表 1：清眞人「史的唯物論的思考と精神分析学的思考との総合の試み」

発表2：宗川吉汪「いま改めて原発問題を考える～福島原発事故から12年9ヵ月」

- 令和6年度の予定として、会員の出版書籍の合評会を含め計画中である。会員の皆様から自分の研究紹介をしたい、あるいは非会員の方で研究紹介をしてもらいたい方はご連絡いただきたい（ただし謝礼はない）。

7. KW集発刊委員会（長谷場健 委員長）

- 2022年2月に開始した「公募KW（第一期）」企画は、14キーワードの応募があり、一部申請取り下げや保留があったが、2024年4月に完了し7キーワード（執筆者5名4組）を学会HPへ掲載した。内訳は①政治人（菊池理夫氏）／②人間の尊厳（同上）／③コミュニティ（同上）④スピリチュアリティ（松本孚氏）⑤共同性（福田鈴子氏・砂子岳彦氏⑥人間生物世界（岩田好宏氏）／⑦生物における生命（同上）である。
- 本大会KW委員会主催ＷＳでも議論の予定であるが、これまでの活動を踏まえて「総合人間学KW記述の在り方」および「総合人間学KW選出の在り方」を改めて議論する。
  (1) 記述の在り方
    - 平易でわかりやすい記述は、分野を超え総合するためには基本的な要件と考える。
    - 総合人間学のKWとして取り上げる理由、問題意識がわかるようにする。
    - 執筆者の専門をベースにしながら、専門の枠を超えて他の専門分野との繋がりが分かるようにする。
    - 自然、社会、人文の総合的視点を持って論考する。
  (2) KW選出の在り方
    - 専門分野におけるKWとは異なる総合人間学的KWはあり得るか。
    - 自説に基づく新造のKWはどこまで認められるか。
    - 採択されたKWはどこまで学会の見解として規範性をもつか。
    - KW集全体の体系・分類はどうあるべきか／必要か
  (3) 「公募KW（第二期）」に向けて
    - KW委員会ＷＳでの「総合人間学KWの記述の在り方」の議論を踏まえて、「公募KW（第一期）」企画に続き、新ためて会員に2024年8月以降にKW公募を実施予定。
  (4) 委員会執筆依頼総合人間学KW選出
    - KW選出は、会員間で共有可能な総合人間学KWを改めて選出すべく、KW委員会ＷＳでの「総合人間学KWとは何か」の議論を踏まえて行う。一案として、これまでの研究大会でのシンポジウムの成果を踏まえたKWの選出を各大会の実行委員長協力の下に進めてみてはどうかと考えている。

8. 広報委員会（太田 明 委員長）

- 例年通り、学会ウエッブサイトの運営を主に活動した。
- HPの可読性向上の課題を認識し、蔭木理事(事務局協力理事)の助力のもとに2022年8月からメニューの変更等、改善に取り組んできた。また楊理事から個別に、学会ウエッブサイトをストーリーラインを重視したランディングページ（LP）形式とする具体的なHP改善提案があった。
- メニューの階層の整理を計画している。
- 各ページの変更・新設を計画している。
  (1) ホーム：冒頭に学会の簡単な紹介文を置き、続けて現在の「直近のイベント／学会誌販売リンク」記事の内容を置き、情報のスリム化を図る。
  (2) お知らせ：現在の「ホーム」の「直近のイベント／学会誌販売リンク」以外の最新情報を一覧する。
  (3) 学会案内 About this Association、大会／研究・談話会、出版／発行物
    - ツリー下層のページへのナビゲーションページとする。

(4) 次回大会、過去の大会：現在の「大会」ページを二つに分割する。
(5) 右サイドバーの更新
(6) 欧文フォントの変更

- 長期的な検討方針として、学会全体の魅力を提示していくような形のサイト構築が必要である。
  - 非会員・初訪問者向けのページの追加
  - 海外向ページの追加（多言語化など）

9. 若手委員会（本多俊貴委員長）

- メンバーを拡充し、若手ワークショップを継続していきたい。
- ワークショップ報告者の成果を『オンラインジャーナル総合人間学』に掲載し、本学会の若手の研究発展を促進していきたい。オンラインジャーナル掲載に向けた論文執筆に取り組む。

10. 役員人事（審議事項）

- 以下の人事について説明があり、承認された。

副会長交代　　河上睦子　→　河野貴美子
編集委員長交代　　佐貫浩　→　宮盛邦友
出版企画委員会委員長の退任（中村　俊）：次期については運営委員会にて再編を検討

（理事の退任 11 人、第 9 期にて退任）
穴見慎一　岩田好宏　小原由美子　オプヒュルス鹿島ライノルト　鬼頭孝佳　久保田貢
斉藤利彦　戸田　清　中村 俊　長谷川万希子　前田幸男

（理事の継続 25 人、第 10 期）
阿部信行　上柿崇英　太田 明　蔭木達也　片山善博　河上睦子　河野貴美子　北見秀司
菊池理夫 木下康光　木村武史　熊坂元大　黒須三恵　近藤弘美　佐貫　浩　鈴木伸国　関　陽子　田中昌弥　長谷場 健　藤井博之　古沢広祐　本多俊貴　松崎良美　宮盛邦友　楊　逸帆

（新理事 7 名、第 10 期）
大橋恵美子（明星学園国際医療専門学校）
竹中信介（モラロジー道徳教育財団 道徳科学研究所）
中野佳裕（立教大学社会デザイン研究科、社会哲学・開発学）
福田鈴子（常葉大学、異文化理解）
砂子岳彦（武蔵野学院大学、科学基礎論）
松本 孚（元相模女子大学教授、平和心理学）
倉本 宣（明治大学農学部）

＜第 10 期役員体制＞
会長　古沢広祐
副会長　　黒須三恵　　河野貴美子　　長谷場健
理事・運営委員
（各委員会委員長・副委員長　事務局長・事務局次長　事務局協力理事）
太田 明　蔭木達也 木村武史　熊坂元大　本多俊貴　松崎良美　宮盛邦友
（副委員長・適宜追加）

編集委員会
委員長　　宮盛邦友

副委員長　未定
編集委員　河野貴美子　北見秀司　倉本 宣　田中昌弥　佐貫 浩　楊 逸帆
（追加の可能性あり）
編集事務幹事　鈴木朋子（交代可能性）
アドバイザー（編集）太田 明

出版企画委員会
委員長・委員について再検討（運営委員会）

研究・談話委員会
委員長　　木村武史
副委員長　未定
委員　　上柿崇英　菊池理夫　　木下康光　楊 逸帆　　（追加の可能性）
アドバイザー 古沢広祐

KW 集発刊委員会
委員長　　長谷場健
副委員長　穴見愼一
委員　　太田 明　古沢広祐　本多俊貴　　（追加の可能性）

広報委員会
委員長　太田 明
委員　未定

若手委員会
委員長　本多俊貴
副委員長　大倉茂
委員　　適宜追加の予定

学会運営・会則等検討委員会
委員長　黒須三惠
委員　熊坂元大　鈴木伸国　古沢広祐
助言者　鬼頭孝佳　長谷場健

監事　岩瀧敏昭　柳沢 遊

事務局
事務局長　　熊坂元大
事務局次長　松崎良美
幹事　　井上浩朗　　高橋知花
（事務局協力理事）　蔭木達也、ほか調整中
アドバイザー　黒須三惠　鈴木伸国

顧問
池内 了 尾関周二　齊藤寿一　野家啓一　堀尾輝久 宮本憲一
＊山極壽一（大会講演後にて依頼）

11. 2023 年度決算（審議事項）

・ 別紙資料のとおり承認された。

12. 2002 年度予算（審議事項）

・ 別紙資料のとおり承認された

Ⅳ. 理事会・運営委員会報告

2024 年度 第 1 回 理事会・運営委員会（議事メモ）

日時　2024 年 8 月 6 日（火）　13 時 15 分～16 時 15 分
場所　Zoom
出席　18 名（役員表順・敬称略）
古沢広祐　河野貴美子　長谷場 健　太田 明　蔭木達也　木村武史　熊坂元大　本多俊貴
松崎良美　河上睦子　鈴木伸国　砂子岳彦　菊池理夫　関 陽子　福田鈴子　松本 孚
楊 逸帆　柳沢 遊

会のはじめに、古沢氏から第 10 期会長就任の挨拶が行われ、第 9 期の振り返りと第 10 期の展望が語られた（巻頭言を参照）。

報告事項

1．事務局

・6 月は入退会なし。7 月は退会 2 名。

2．各種委員会

1）学会運営・会則等検討委員会（黒須三恵 委員長）

・ 熊坂事務局長が委員に加わることになった。
・ 学会活動の活性化、広報拡大について、会則について検討が必要であるとの報告があった。

2）編集委員会（河野貴美子 委員長代理）

・ 8 月中に委員会を開催予定である。
・ オンラインジャーナルへの原稿依頼と J-Stage 登録作業が急務であるが、作業が 1 ヶ月ほど遅れているため調整が必要である。
・ 記事が多いと作業量が膨れ上がるため、大会企画の報告とそれ以外とを分けて発行してはどうかとの提案がなされた。
・ 追悼集の編集作業もあるので、校正作業などのスリム化を考える必要がある。
・ 原稿提出から校正まで時間があくと手直しの量が増える傾向があるのでコンパクトにしたい。
・ J-Stage の手続きも時間がかかるので、作業を分散させることが望ましい。
・ ＊J-STAGE、「オンラインジャーナル総合人間学」掲載場所：
https://www.jstage.jst.go.jp/browse/synanthro/-char/ja

3）KW 委員会（長谷場健 委員長）

- 第二期 KW 原稿（3000 字以内）の公募案内を ML および HP で行った。

4）若手委員会（本多俊貴 委員長）

- 大会では宗教についての WS を行った。大会報告者は論文化に向けて準備を進めている。
- メンバー補充については、後日候補者のリストを作成する。

3．大会・シンポ・WS などの振り返り

- シンポジウムのアンケートをふまえると、若手や女性の参加者は昨年度に比べて増加している。
- シンポジウムの内容を何らかの形でまとめたいとの意見が出された。
- COVID-19 により対面での大会運営が中断されていたためノウハウが失われた。ノウハウや課題を今後に向けて改めて共有する必要がある。
- 大会では資料のアップロードが義務化されていなかったため、WS や個人報告で内容を把握し辛い場面も見られた。
- 事前資料の配付は徹底したほうがよいとの意見も出された。
- 会場で印刷した資料を配付するかは検討課題だが、配ってもよいが手間とコストがかかるとの指摘があった。
- 今回は対面参加による収入があった。今回は参加費をどの程度集めることができるか見込みが立たなかったため予算を切り詰めたが、今後対面で開催する場合、予算は 25 万円程度を見込めばよいのではないかとの意見があった。
- 今後、大会をオンラインメインにするか対面メインにするかも引き続き検討が必要であるとの意見があった。
- 今大会ではオンライン決済を実施したが、とくにトラブルなく処理できたことで、利便性が確認できた。他方で、オンライン決済に関する知識やノウハウが属人的であるため、業務の引継ぎが難しくなることも指摘された。
- 大会での一般報告の件数が減少していることと、会員拡大の難しさについて意見交換がなされた。
- 以前は一般報告で会場ごとに、報告内容に近い分野の研究者が司会を務めていたことへの言及があり、その当時の方式への回帰も検討されたが。現在では会員の研究分野や関心についての情報が共有されておらず、人的ネットワークも失われているため困難であることも確認された。
- 大会の音声が聞き取りづらかったとのオンライン参加者の声に対して、アドラー理事からさまざまな提案があった。アドラー理事には、次回大会の会場が決まり次第、技術的提案を（会場に足を運んで実際に確認できる日本側の協力者とともに）まとめていただくよう依頼する提案がなされた。

4．出版企画について

- 学会誌を、シンポジウムテーマであるケアを主題とすることが提案されたが、出版時期などの兼ね合いから学会誌としての出版は難しいとの意見も出された。今回は例年通りの刊行にて進める。シンポジウム企画責任者の蔭木理事を中心に、検討を続けることとなった。

5．次期大会について

- 都市（または工業的生活空間）と人間というテーマが提案された。
- 会場の候補地としては徳島大学が挙げられ、徳島の地域文化と大阪万博との対比を視野に入れてテーマを検討することや、徳島で開催することの意義を打ち出すことが提案された。
- また若手研究者の対面発表を支援することも提案された。

6．その他

- 学会 20 周年に向けた準備会の組織を進めることが確認された。
- 学会誌に掲載された文章（論文、研究ノート、報告）を、自動的に J-Stage に登録する旨を NL にて記載することが提案された。

V．決算・予算資料など

1. 2023 年度決算資料

収入の部	2023年度決算	予算	2022年度決算
年会費	977,000	1,630,000	1,079,000
今年度・一般会員（満額会費対象者）	546,000	1,036,000	716,000
今年度・一般会員（減額会費適用者）	64,000	124,000	68,000
他年度年会費	367,000	470,000	295,000
寄付金・特別講演会収集金（大会除く）	0	10,000	17,000
書籍売上	0	5,000	20,000
利息	0	0	3
収入合計	977,000	1,645,000	1,116,003
支出の部		予算	
大会運営費	20,700	180,000	129,133
年会費等振込手数料・引出手数料 他	3,720	5,000	3,060
理事会・運営委員会活動費	0	3,000	0
会議代（湯茶代など）	0	0	0
その他（会場代・文具代など）	0	3,000	0
研究・談話委員会活動費	0	28,000	0
研究会・談話会開催費（講師謝金など）	0	20,000	0
郵送費（談話会案内はがきなど）	0	3,000	0
その他（会場代・文具代など）	0	5,000	0
若手委員会活動費	0	5,000	0
交通費	0	5,000	0
その他（会場代など）	0	0	0
広報委員会活動費	0	0	0
チラシ発注費	0	0	0
その他	0	0	0
事務局活動費	237,504	245,000	219,636
事務用品・消耗品費	0	5,000	0
郵送費・配送代	54,284	12,000	39,636
印刷費（NL・大会予稿集など）	0	10,000	0
その他（封筒印刷・振替伝票印刷・コピー・FAX等）	3,220	3,000	0
交通費	0	10,000	0
事務局幹事報酬	180,000	180,000	180,000
会員発送作業アルバイト代	0	20,000	0
その他（会議室代など）		5,000	0
編集委員会活動費	127,731	191,000	158,251
オンラインジャーナル維持管理費	7,731	8,000	7,731
郵送費・コピー代	0	3,000	10,520
編集幹事報酬	120,000	120,000	120,000
J-STAGE登録・更新手続き等アルバイト代	0	60,000	20,000
学会誌支払（出版費用、送料）	550,000	560,000	592,146
ZOOM有料ライセンス	21,376	24,000	21,376
会員管理システム維持費	143,908	150,000	144,452
若手奨励賞副賞費	0	30,000	0
学会基金積立金	0	0	30,000
学術誌積立金	0	50,000	50,000
予備費	0	144,851	0
支出合計	1,104,939	1,615,851	1,348,054

2. 学会資産資料

2023年度末 学会資産		
	銀行(所在地)	金 額
預貯金等	郵ちょ振替口座 (世田谷上馬支店)	1,624,445
	郵ちょ総合口座 (世田谷上馬支店)	137,433
	払出現金	1,819
	小計	1,763,697

流動資産	2022年度末残高	1,380,596
	2023年度繰越金	△127,939
	合計	1,252,657
積立金	②学会基金	211,040
	③学術誌積立金	300,000
	小計	511,040
学会資産	計	1,763,697

3. 2024 年度予算資料

収入の部	2023年度決算	予算
年会費	977,000	977,000
今年度・一般会員(満額会費対象者)	546,000	546,000
今年度・一般会員(減額会費適用者)	64,000	64,000
他年度年会費	367,000	367,000
寄付金・特別講演会収集金(大会除く)	0	0
書籍売上	0	10,000
利息	0	0
収入合計	977,000	987,000

支出の部		予算
大会運営費	20,700	180,000
年会費等振込手数料・引出手数料 他	3,720	0
理事会・運営委員会活動費	0	0
会議代 (湯茶代など)	0	0
その他 (会場代・文具代など)	0	2,000
研究・談話委員会活動費	0	0
研究会・談話会開催費 (講師謝金など)	0	0
郵送費 (談話会案内はがきなど)	0	0
その他 (会場代・文具代など)	0	0
若手委員会活動費	0	0
交通費	0	0
その他(会場代など)	0	0
広報委員会活動費	0	0
チラシ発注費	0	0
その他	0	0
事務局活動費	237,504	241,500
事務用品・消耗品費	0	3,000
郵送費・配送代	54,284	55,000
印刷費 (NL・大会予稿集など)	0	0
その他(封筒印刷・振替伝票印刷・コピー・FAX等)	3,220	3,500
交通費	0	0
事務局幹事報酬	180,000	180,000
会員発送作業アルバイト代	0	0
その他 (会議室代など)	0	0
編集委員会活動費	127,731	128,000
オンラインジャーナル維持管理費	7,731	8,000
郵送費・コピー代	0	0
編集幹事報酬	120,000	120,000
J-STAGE登録・更新手続き等アルバイト代	0	0

学会誌支払（出版費用、送料）	550,000	510,000
ZOOM有料ライセンス	21,376	24,000
会員管理システム維持費	143,908	150,000
若手奨励賞副賞費	0	0
学術誌積立金	0	0
予備費	0	0
支出合計	1,104,939	1,233,500

VI. 事務局からのお知らせ

1) Newsletter のメール配信について： Newsletter は、41 号から郵送事務と経費削減のために、電子メール登録のある会員の皆さまには、電子メールによる配信をさせていただくこととなりました。
Newsletter の発行にあわせて、学会ホームページ（HP）に、Newsletter が配信された旨告知し、会員の皆さまに電子メールでの着信をご確認いただくことといたしました。お使いのメールによって、迷惑メール等へ振り分けされるケースがありますので、見落としされませんようご注意ください。学会からのメール配信で不着信につきましては、学会事務局までご一報ください。
2) 会費納入状況などの確認は、学会の HP の「会員限定」のところにある、「会員用マイページ」へのアクセスで、各個人限定の閲覧にてご確認ください。
会員限定のマイページにアクセスする際は、年誌とともにお送りしている請求書に記載されている ID と パスワードをご利用ください。基本的に事務局にて慎重に管理していますので、メルアドや連絡先の変更などは、事務局にご一報ください。
3) 会員の皆さまへの会費納入の案内は、書籍版・機関誌の発送時にて、「宛名ラベル」での会費告知と振替用紙の同封の送付の際にて、行わせて頂くこととなりました。ご理解、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。
4) 学会誌・書籍（普及ブック）版のご活用について、学会活動の貴重な成果が掲載されておりますので、ゼミ演習等でのテキスト利用など、ぜひご活用と、ご協力頂きますようお願い申し上げます。
5) 年度内の今後の運営委員会・理事会の日程（現時点での予定）は以下の通りです。

2024 年度、理事会・運営委員会の当面の予定（各回にて日程調整）
（土・日、休み時期は平日、適宜日程調整、zoom 会議）
第 2 回 2024 年 10 月上旬 運営委員会（理事参加歓迎）
第 3 回 2024 年 12 月 中～下旬 運営委員会（理事参加歓迎）
第 4 回 2025 年 2 月 中旬 理事会・運営委員会
第 5 回 2025 年 3 月末 or4 月中旬 運営委員会（理事参加歓迎）
(次年度大会の準備状況次第にて調整)
第 6 回 2025 年 5 月 中～下旬

2020 年度からオンライン会議による開催を踏まえて、従来の運営委員会を理事の自由参加として運営委員会・理事会として行ってきました（2021-23 年度）。2024 年度も基本的には同様なのですが、会議名を明示しました。 運営委員会（理事の参加歓迎）ということで、会議開催は理事メール宛として理事の積極的参加を期待してご案内いたします。

学会誌販売のご案内

総合人間学会誌『総合人間学』の以下ラインナップを、学会の在庫分にかぎり

1 冊　**特価１０００円**（送料別）にて販売いたします！

購入ご希望の方は、注文冊数、送付先を学会事務局までメールまたは fax にてお送りください。

第 13 号　『科学技術時代に総合知を考える――文系学問不要論に抗して』
第 12 号　『〈農〉の総合人間学』
第 11 号　『人間にとって学び・教育とは何か――未曾有の教育危機に直面して』
第 10 号　『コミュニティと共生――もうひとつのグローバル化を拓く』
第 9 号　『〈居場所〉の喪失、これからの〈居場所〉――成長・競争社会とその先へ』
第 8 号　『人間関係の新しい紡ぎ方――3・11 を受け止めて』
第 7 号　『3・11 を総合人間学から考える』

【本件連絡先：学会事務局】
・E メールアドレス contact@synthetic-anthropology.org

＊　学会誌・書籍版は、現在「本の泉社」から一般書籍として刊行されています。第 14 号からのものは、学会員は 2 割引きにて入手できますので、「本の泉社」ないしは学会事務局に、お申し出ください。
・出版社サイト：https://honnoizumi.co.jp/book/2024/0606.html
＊＊　ゼミや読書会などでの複数購入の際は、特別割引にて対応しますので、ご一報ください。

（事務連絡）　　《 学会費の納入お願い 》

＊総合人間学会・年会費、昨年度（2023 年度）の振り込みがまだの方は、今年度と合わせてお振り込み下さい。学会誌（書籍版）送付時に振り込み用紙を同封、見当たらない方は郵便局の振込用紙にてお願いします。
（過去年度未納・滞納の会員の方は、早急にご対応のほど宜しくお願い申し上げます）
● 会計年度としては、4 月からは 2024 年度となりますので、2024 年度の学会費につきまして、早めの納入をお願いいたします。6 月研究大会前に、学会誌『総合人間学 18』の刊行・送付をしていますので、同封の振込用紙をご利用ください。

学会費：一般：7,000 円　・減額：4,000 円（減額は申請者のみ：学生や非常勤職などへの配慮）
　・加入者名：　総合人間学会　　口座記号番号：　00180-2-579072
① 郵便局そなえつけの振替用紙、② ATM 送金、③ 電子振込み、に対応しています。

◆ひろく学会員の門戸を開いておりますので、ご関心の方々にぜひ入会をお勧めください。
　学会 HP（入会案内）参照：　http://synthetic-anthropology.org/?page_id=57